

『美術館』はどこへ行くのか

九州大学 後小路雅弘

昨年、北九州市立美術館において、減り続けていた「専門」学芸員²が退職によってゼロになるという事態が生じ、最近になってマスコミ各社があいついで報道、また市民有志によるシンポジウムが開催され、市議会でも問題となっている。西日本の公立美術館の先駆的存在として、後発の美術館にとっての道標ともいえた同美術館の窮状は、近隣の美術館学芸員はもちろん、学芸員志望の学生、あるいは美術史、美術館学等の研究者にとっても、座視できない状況になっていると言えよう。そこには、北九州市立美術館固有の事情もあるだろうが、そうした個別の問題を越え、今日の日本の美術館を取り巻く問題の端的な表れとして捉え直し、それを普遍的な課題として共有していくことが、われわれにとってはより重要だろう。

「冬の時代」ということばが陳腐に思われるほど、美術館を取り巻く状況は厳しく、その厳しさは、一過性のものというよりは、もっと本質的なもののように思われる。地方自治体の財政難、指定管理者制度、博物館法の改正、学芸員の減員、研究環境や雇用条件の悪化など、かつては、すべてが右肩上がりの幻想の中にあった日本の社会の横並びの豊かさ志向の中で、歓迎され愛され肯定されていた美術館も、いまや批判や否定の対象になってきた感がある。あれほど待望し、歓迎した、わたしたちの美術館も、できあがってしまえば、たいしてありがたくも、有益でもなく、意外にお金はかかり、学芸員はひとりよがりの自己満足に終始している、と思っている地域住民も多いのではないだろうか。

ともあれ、危機は、常に新たな可能性をはらむものである。美術館の危機は、そのまま社会における美術館の存在意義やミッションを問い直し、あらたな展開の契機になるはずだ。それができなければ美術館に、そもそも未来などないだろう。

九州・山口の美術館の現状と課題について報告し、問題を共有しつつ、今後の展望について議論したい。

なお、報告を後小路が行い、中島順一氏、川浪千鶴氏がコメンテーターを務める。

註1 ここでは美術館としたが、ここで報告する問題は、博物館を含め広くミュージアム全体に共通する問題であると考ええる。

註2 本来「専門でない学芸員」というのはあり得ないわけで、この言葉は矛盾ではあるが、新聞各紙にならい、美術史や美術館学等の専門的な教育をバックグラウンドとする学芸員のことを指す。